

学会だより

日本天文学会昭和 53 年度秋季年会記事

昭和 53 年度秋季年会は仙台市民会館地下ホールにおいて 10 月 12 日 (木) ~ 14 日 (土) の 3 日間にわたって開催された。講演数 125, 出席者約 260 名, 各セッションの座長は次の方々であった。

- 12 日 午前 山下 泰正, 杉本 大一郎 (講演数 18)
午後 小暮 智一, 高倉 達雄 (" 24)
13 日 午前 海野 和 三 郎, 高 窪 啓 弥 (" 18)
午後 蓬 茨 靈 運, 奥 田 治 之 (" 25)
14 日 午前 河 鱈 公 昭, 柿 沼 隆 清 (" 18)
午後 青 木 信 仰, 弓 滋 (" 22)

会期中 13 日の昼に理事会, 夜に懇親会が開かれた。又 12 日の夕方, 天文学研究連絡委員会将来計画委員会の主催により, 「将来計画についての意見交換会」がもたれた。

昭和 54 年度科学研究費補助金配分審査委員候補者

日本学術会議研究費委員会より標記の件について推薦の依頼がありましたので, 本学会として評議員の書面投票により下記の方々を推薦いたしました。

第 1 段審査委員候補者: 海野和三郎, 青木信仰

文部省はこの推薦にもとづいて第 1 段審査委員 1 名を任命します。なお第 1 段審査委員には小暮智一, 河鱈公昭, 第 2 段審査委員には古在由秀の各氏が任期 1 年を残しております。

掲 示 板

国際天文学連合 (IAU) 会員の推せんについて

日本学術会議天文学研究連絡委員会は 12 月 18 日会合をひらき, 来年の IAU 総会で国内委員会から推せんする候補者を決めます。IAU の General Member として適当な方 (IAU Information Bulletin No. 39, 1978 年 1 月を見て下さい) のリストを委員が持ちよることになっていますが, おちのないう, 適当と認められる方をお気付きの際は, 委員までご連絡下さい。なお, 推せんに際しては, 上記の Bulletin の 6 頁のっている Form を一人一人についてご用意下さい。

天文学研究連絡委員会委員長
古在由秀

なお, IAU の Member で, 現在天文学の研究活動をしておらず, Member を辞退したいと考えておられる方もお申し出下さい。

書 評

林忠四郎編

「星の進化——その誕生と死——」

(共立出版, 2,400 円)

編者, 及び著者の佐藤文隆, 蓬茨靈雲, 中野武宣各氏による星の進化の理論についての入門的教科書である。

目次は, 1 星の性質, 2 星間のガス雲, 3 ガス雲の収縮と星の誕生, 4 生まれてから主系列まで, 5 主系列の星, 6 巨星, 7 進化の最終段階と超新星爆発, 8 X線星と近接連星, 9 高密度星——白色矮星と中性子星——, 10 ブラックホール, 11 元素の起源, である。少数の例外を除いて, 数式を使用しない方針が貫かれているが, これは決して内容の簡単なことを意味しない。多くの場合, 式で表現する所を物理量の関係の丁寧な言葉による説明で置き換えてあって, 物理的な意味が定性的に捕えらるようになっている。例えば放射の性質については, 付録に上記の方針でスペクトル線, 黒体放射, シンクロトロン放射等が一切式を使わずにまとめてある。

しかし, 初めて天文学の本を読む人が, つまり天文学の本を初めて読む大学 1 年生等が, この本を容易に読み通せるとは思わない。ある程度以上のテンポで新しい概念が次々に登場すると, 初めての読者はついていけないであろう。時として, ヘリウム・フラッシュの項のように研究者間のやりとりの調子で文章の進む所もある。そういう所は難しく, 確定的な結論が無いのでスッキリしないが, これが未知の要素を含む最前線の生々しい姿なのである。

この本の構成は, 目次のように星の形成から超新星爆発の後までを時間的にたどったものである。主系列星, 巨星, 中性子星といった定常的な星の構造や, ゆるやかな進化については研究が進んでいるので, ミクロな物理的素過程から積み上げていって現象を理論的に説明することができる。これに対して, 超新星爆発や X線星のような過渡的な現象については現在のところ観測が先行しており, 理論がこれを追っている。このような星の進化の研究の現段階を反映して, ある部分 (3 章-7 章の前半, 9 章-11 章) は理論を中心に, 他の部分 (1, 2 章, 7 章の後半, 8 章) では観測事実を中心にした書き方がされている。

結局この本は星の進化論を研究しようという学生が, 権威ある入門書として読むとか, 天文の他の分野や物理の研究者が星の進化論の大すじを簡単に学ぶのに適していると思う。この分野を開拓してきた人の手によるそのような重みある本である。教養課程の講義用には難しすぎると思うが, 大学での講義のトラの巻となって日本の天体物理学の知識の普及に貢献するであろう。多くの人に読んでほしい高級な本である。(大師堂経明)